



明化の教育

1月号 (第452号)
平成30年1月9日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

本年も、明化小学校をどうぞよろしく願ひいたします

校長 溝畑 直樹



穏やかな中に平成30年が始まりました。皆さまにとって、本年が幸多き年となることを心から祈ります。

今日から3学期がスタートしました。本年も教職員一同全力で子供たちの教育にあたってまいります。引き続きのご支援をどうぞよろしく願ひいたします。

昨年末に発行された『TOKYO 人権 Vol.76』にハンセン病回復者の石山春平さんのインタビュー記事が掲載されていました。

左手の小指が曲がってきたのが、最初の兆候でした。11歳の時にハンセン病と診断されると、すぐに小学校を強制的に退学させられ、学校は私の机や椅子を焼却したそうです。私の机があった一角には床に新聞紙が貼られ、卒業まで立ち入り禁止になっていたと、最近同級生から聞きました。

当時ハンセン病は恐ろしい伝染病であり、患者は強制隔離しなければならないとされていました。父親は「家の外に出さない」という条件で自宅の納屋での家庭内隔離生活を役所に要望し、強制収容は免除されました。

13歳のころ、顔の半分近くが赤くはれてくると、親友からは「お前と遊ぶと両親に叱られる。お前は一番の友達だけど、お別れにきた。いつまでも俺は友達だからな」と告げられ、それ以来、誰とも遊ばなくなりました。それでも、夜になるとこっそり映画を見に行くこともありました。映画館は暗いので顔を見られる心配がないからです。帰り道、近所の女の人と一緒になると、彼女たちは私の病気を怖がって、悲鳴を上げて逃げて行きました。近所のおじさんが飛び出てきて、私だと分かったら「お前は汚いから、道を歩くな」と石を投げつけてきました。私は、ずっと下を向いたまま帰りました。

自宅での療養生活は3年続きました。その間には自殺を図ったこともありましたが、しかし死にきれず、「今日限りで石山春平は死んだ」と考えることで心に区切りをつけました。「自分は死んだ」と思えば、人から何を言われても平気ですから。それでも、村の人から罵倒されたままでは悔しいので、せめて長生きをして、見返してやろうと考えました。父親には「同じ病気の仲間がいる病院へ行きたい。死ぬ前に人と話したい」と訴えました。

その3日後、人気のない村はずれに病院のトラックが迎えに来ました。すると、トラックから降りてきた女性が小走りで私のところに来て、抱きしめてくれたのです。「つらかったらうね。よく我慢したね」って。私は3年間、他人から優しい言葉など一度もかけてもらったことがなかったので、せきを切ったようにわんわん泣いてしまいました。その女性は目立たないように白衣の上からコートを着ていましたが、彼女の体温が全身に伝わってきたのを今でも覚えています。(一部抜粋)

本校は、人権尊重教育推進校として、『人と人とは、その関わりの中で最も大切にしなければならないものは何か』を、子供たちと教職員とが共に考え続けてきました。その答えはいまだ出ませんが、石山さんを抱きしめた看護師さんの思い、それは、本校の進むべき道に対して、一つの示唆を与えてくれているような気がします。